

はいずみ

一 「掃き墨」(ごま油・なたね油などの油煙で製した眉墨)の音便。今の妻が「はいずみ」をおしろいを取りちがえて塗った事による篇名。
二 下京辺に。下京は上京に比して人目も少なくさびしかった。↓補注八二
三 身分賤しくない男が、生活の不如意な女を、かわいく思つて。↓補注一八八
四 その男が。五 その親しい人のむすめを。
六 こっそり忍び通つていた。↓補注一八九
七 最初の妻よりは愛情も深く感ぜられて。
八 年來つれ添う妻を持つていらつしやるけれども、こうなった上はどうしようか(致し方ない)、といつて許してむすめのもとへ通わせる。
九 底本ほか諸本「なめれ」。三・神本による。
今はもう二人の間もおしまいのようだ。新しい女の親は、男をよもや通わせてなどもおかせまい(きつと女を引きとれというだろう)。
二 どこか行ける所もあればよいがなあ。すっかりつれなくなつてしまわぬ前に男から離れて
二 無理強いに。強引に。「しまおう。
三 妻帯などしてない人で、是非にとむすめを望んだ人にめあわせるはずなのに。
三 このように不本意にもあなたが通いはじめられてしまったが、それを残念には思うけれども、今更いっててもかかない事だから、こうして通わせ申し上げているのです。↓補注一九〇
四 妻をちゃんと持つておられる人だのに(婿にしても仕方あるまい)。「むすめさんを深く思う」と、そう口で言つても家においている妻をこそ大事に思うのであらう。↓補注一九一
五 なるほどそういうのもっともな事です。
六 あちら(男の家)におつれ申さないのを、疎略なあつかいと思われるのなら。

下^二わたり^一に、品^三賤^二しからぬ^一人の、事^三もかなはぬ^二人を、に^一くからず思^三ひて、年^二ごろ^一経^二るほどに、親^四しき人のもとへ往^一き通^三ひけるほどに、む^五すめを思^二ひか^一けて、み^六そかに通^二ひありき^一けり。珍^七しければにや、はじめの人よりは志^八ふかくおぼえて、人目^九もつゝまず通^{一〇}ひければ、親^{一一}聞^二きつ^一けて、「年^{一二}ごろの人をもち給^{一三}へれども、いかゞはせむ」とて許^{一四}して住^{一五}ます。もとの人聞^{一六}きて、「今^{一七}は限^{一八}りなめり。通^{一九}はせてなどもよもあらせじ」と思^{二〇}ひわたる。「往^{二一}くべき所もがな。つらくなり果^{二二}てぬさきに離^{二三}れなむ」と思^{二四}ふ。されどさるべき所もなし。
今^{二五}の人の親^{二六}などは、お^{二七}し立^{二八}ちて言^{二九}ふやう、「妻^{三〇}などもなき人のせちにいひしに婚^{三一}すべきものを、かく本^{三二}意^{三三}にもあらでおはしそめてしを、くちをしけれど、いふかひなければ、かくてあらせ奉^{三四}るを、世^{三五}の人々は、妻^{三六}据^{三七}ゑ給^{三八}へる人^{三九}を。思^{四〇}(ふ)とさいふとも、家^{四一}に据^{四二}ゑたる人こそ、やごとなく思^{四三}ふにはあらめ」など言^{四四}ふもやすからず。げにさる事に侍^{四五}る」など言^{四六}ひければ、男^{四七}、「人^{四八}數^{四九}にこそ侍^{五〇}らねど、志^{五一}ばかりはまさる人侍^{五二}らじと思^{五三}ふ。か^{五四}しこには渡^{五五}し奉^{五六}らぬを、おろ

七 今すぐにもおつれ申しましょう。そんなおことはほんとに心外に存じます。

六 せめてそうでもさせていだきたい。

五 ああ、あの女(本の妻)もどちらにやろうか。(やるべきあてもなく困惑するさま)

四 今度の妻の方が大切だから。↓補注一九二

三 こうくだなど言つて様子も見てみよう。

二 上品で子供っぽい人。↓補注一九三

一 恥じらつて、いつものようにはしゃべらないで、うち沈んでいるのを。↓補注一九四

新らしい妻の親に、そう(今の妻を家に連れてくると)言つたから。

あなたを想う心だけはお変らないけれど、女の親にも知らせないで、こんなふうに通いはじめたので、ふびんさに通つていますが、あなたがつらいと思われるだろうよと思うと。

なんであんな事をしたことだと、今こそ悔しいので(縁を切りたく思うが、しかし今でも縁を切るわけにもまいりません。↓補注一九五) あちらで、土忌をせねばならぬからここにむすめを移せと言いますが。↓補注一九六

元よそへ行こうかと思ひですか。

なんの心苦しいことがありましようか。このまゝ端のほうにいらつしやいよ。

こっそり急にどこへ行かれることがありましよう。一説、「忍びて」で切り、我慢しての意。

この家に住まなくてもよからうになあ。

年来私には行く所もないと見知りながら、

こんな言うことよ。

そ知らぬ顔で。三 もっともな事です。

私はどこへなりとも行きましよう。今まで

こうして平気で、世の中のつらさも知らぬ有様だったのこそありがたいことでした。

はいずみ

かに思さば、たゞ今も渡し奉らむ。いとことやうになむ侍(る)」と言へば、親

「さだにあらせ給へ」とおし立ちて言へば、男、「あはれ、かれもいづちや

まし」とおぼえて、心のうち悲しけれども、今のがやごとなければ、「かく」

など言ひて、けしきも見むと思ひて、もとの人のがり往ぬ。

見れば、あてにこゝしき人の、日ごろものを思ひければ、すこし面やせて、

いとあはれげなり。うち恥ぢしらひて、例のやうにももの言はで、しめりたる

を、心苦しう思へど、さ言ひつれば、言ふやう、「志ばかりは變らねど、親に

も知らせで、かやうにまかりそめてしかば、いとほしさに通ひ侍(る)を、つら

しと思すらむかしと思へば、何とせしわざぞと、今なむくやしければ、今もえ

かき絶ゆまじくなむ。かしこに、土犯すべきをこゝにわたせとなむ言ふを、い

かと思す。ほかへや往なむと思す。なにかは苦しからむ。かくながら端つ方に

おはせよかし。忍びてたちまちにいづちかはおはせむ」など言へば、女、「こゝ

に迎へむとて言ふなめり。これは親などあれば、こゝに住まふともありなむか

し。年ごろ行く方もなしと見る／＼、かく言ふよ」と、「心うし」と思へど、

つれなくいらふ。「さるべき事にこそ。はや渡し給へ。いづちも／＼往なむ。

今までかくてつれなく、うき世を知らぬけしきこそ」と言ふ。いとほしきを、

一 そのまま(今の妻が居つくよう)になるわけではなく。底系「やそにては」。三・神・函本に

二 今の妻が帰ったなら。三 男が。「よる。

四 つらいものは夫婦の縁だねえ。どうしよう。

五 その女が強引におしかけて来る時には、私

がひどくみすばらしい様子で出て見られるのも

六 ひどい様子でむさくるしくはあるうが。

七 京都府愛宕郡大原村。

八 「いまこ」をさす。この一句は挿入句。

九 いまこの家は、片時でもおいでになれそう

にもありませんでしたけれど、しかるべき所が

見つかるまでは、ひとまずいらっしやいませ。

二〇 本の妻と召使は。(両者の言葉をうける)

二 本の妻は召使に。「する」と連体形で止め

たのは詠嘆の意か。「焼かせなどする」も同じ。

三 人に見られて恥ずかしい手紙など。由池

「ものを」。

三 今の妻を男があすつれてこようとするのだ

から、今さら自分で出て行くことについて、と

やかくこの男に知らせるわけにもゆかない。

四 車なども誰に借りようか(外に借りる所も

ない)。本来なら私を送ってくれとこそは言う

べきだと思ふにつけても(今さら車を借りたい

などいうのも)ばかばかしいけれど(外にしかた

がないから)こう言つてやる。↓補注一九七

五 今晚よそへ行こうと思ひますから。

六 どちらへ行こうと思うのだろうか。せめて

出てゆく様子なりとも見よう。↓補注一九八

七 すぐにこの女の所へ。八 車を待つ。

九 月さえもこの家をつまでも住み家として

澄んだ光で照らしている世なのに、わが身がこ

うして遠く離れようとは思つた事があるうか。

三 男が来たのでしらの顔で横を向いていた。

男、「などかうのたまふらむ。やがてにてはあらず、たゞしばしの事なり。歸

りなば又迎へ奉らむ」と言ひおきて、出でぬる後、女、使ふものとさし向ひて

泣き暮らす。「心うきものは世なりけり。いかにせまし。おし立ちて來むには、

いとかすかにて出で見えむも、いと見苦し。いみじげにあやしうこそはあらめ、

かの大原のいまこが家へいかむ。かれよりほかに知りたる人なし」。かく言ふ

は、もと使ふ人なるべし。「それは片時おはしますべくも侍らざりしかども、

さるべき所の出で來むまでは、まづおはせ」など語らひて、家のうち清げに掃

かせなどする。心ちもいと悲しければ、泣くく恥づかしげなるもの焼かせな

どする。

三 今の人明日なむ渡さむとすれば、此男に知らすべくもあらず。「車なども誰

にか借らむ。送れとこそはいはめ」と思ふもをこがましけれど、言ひやる。

二五 「こよひなむものへ渡らむと思ふに、車しばし」となむ言ひやりたれば、男、

「あはれ、いづちとか思ふらむ。往かむさまをだに見む」と思ひて、今こゝへ

忍びて來ぬ。女、待つとて端にゐたり。月の明きに泣く事かぎりなし。

我(が)身かくかけ離れむと思ひきや月だに宿をすみはつる世に

と言ひて泣くほどに、來れば、さりげなくて、うちそばむきてゐたり。「車は

三

二

三

二

三

二

三

二

三

二

二 車は牛が都合わるくて(用立てかねるが)馬があります。

三 ほんの近い所ですから、牛車は仰々しうございます。それならばその馬でもお貸し下さい。夜がふけぬさきに参りたく存じます。(下京から大原までは三里あまり)

三 今の妻の所では、みな明朝来ようと思つていようだから、のがれようもないので。

四 本の妻に気の毒に思いながら。底本ほか諸本「おもひく」。三・神「思く」。あるいは「思ふく」とみるべきか。

三 女が馬に。三 体つきはたいそう小柄で。

三 (髪は)背たくけくらの長さである。

三 あちこち身のまわりなどとりつくろうと。

三 女はひどく悲しいけれど、我慢してものもいわない。

三 ついその辺の所だから、私ひとりでかまいません。馬はすぐお返ししましょう。「あ(敢)へなむ」は「敢えて行く事ができるよう」の意。

三 その間はこちらにおいて下さいませ。

三 私の行く先は見苦しい所ですから。

三 男は、そうもあらうと思つて、あとに残つ本の妻。

「て簀子に腰をかけていた。

底ほか諸本「なとて」。函・浜・信本による。

三 近衛の中將少將などが召しつれる童。ここでは単に一般の人の召使の意か。↓補注一九九

毛 涙をかくしてこらえていたけれど。

三 「たゞいかに」と言ふ」にかかる。

三 本の妻があゝの召使の女を道案内にして。

四 すぐその辺とおっしゃつて、お供の人もおつれにならないで、こんなに遠くに行くのはどういふわけでしょう。

三 底系「て」なし。他諸本による。

はいずみ

牛^{うし}たがひて、馬^{うま}なむ侍(る)」と言^いへば、「たゞ^三近^{ちか}き所なれば、車^{くるま}は所^せ狭^せし。さ

らばその馬^{うま}にても。夜^よの更^ふけぬさきに」といそげば、いとあはれと思^{おも}へど、か

しこには、みな朝^{あした}にと思^{おも}ひためれば、のがるべうもなければ、心^{こころ}ぐるしう思^{おも}ひ

く、馬^{うま}ひき出^いださせて、簀^す子^こに寄^よせたれば、乗^のらむとて立^たち出^いでたるを見^みれ

ば、月^{つき}のいと明^{あか}きかげに、有^{あり}様^{さま}いとさゝやかにて、髪^{かみ}はつやゝかにて、いとう

つくしげにて、たけばかりなり。男^{をとこ}、手づから乗^のせて、こゝかしこひきつくろ

ふに、い^二みじく^一心^{こころ}うけれど、念^{ねん}じてものも言^いはず。馬^{うま}に乘^のりたる姿^{すがた}・頭^{かしら}つき、

い^二みじく^一をかしげなるを、あはれと思^{おも}ひて、「送^{おく}りに我^{われ}も参^{まゐ}らむ」と言^いふ。「た

ゞこゝもとなる所なれば、あへなむ。馬^{うま}はたゞ今^{いま}返^{かへ}し奉^{たてまつ}らむ。そのほとはこゝ

におはせ。見^み苦^{くる}しき所なれば、人^{ひと}に見^みすべき所にも侍^{さむらい}らず」と言^いへば、さもあ

らむと思^{おも}ひて、とまりて尻^{しり}うちかけてゐたり。

三^四 この人^{ひと}は、供^{とも}に人多^{おほ}くはなくて、昔^{むかし}より見^みなれたる小^こ舎^{どわら}人^{わら}童^{わらわ}ひとりを具^ぐして

往^いぬ。男^{をとこ}の見^みつるほどこそ隠^{かく}して念^{ねん}じつれ、門^{かど}ひき出^いづるよりい^二みじく^一泣^なきて

ゆくに、この童^{わらは}、い^二みじく^一あはれに思^{おも}ひて、この使^{つか}ふ女^ををしるべにて、はるば

るとさして行^ゆけば、「たゞこゝもとおほせられて、人も具^ぐせさせ給^{たま}はで、か

く遠^{とほ}くはいかに」と言^いふ。山^{やま}里^{さと}にて人^{ひと}もありかねば、いと心^{こころ}細^{ほそ}く思^{おも}ひて泣^なきゆ

一 荒れはてた家に。

二 たいそう美しげであった妻の様子が。

三 人がさせるのではなく我が心から。「思ひゐたる」にかかる。

四 女は道々どんなに思いながらゆくだろう。

↓補注二〇〇

五 簀子に腰かけて足を下にさげたまま、物によりかかってねている。↓補注二〇一

六 大原のいまこの家に。

七 どうしてこんな所にはおいでになろうとなさるのですか(おいではなれますまい)。

八 早く馬をつれていらっしやいな。ご主人が待っていらっしやるでしょう。

九 どこにおとまりになったか。↓補注二〇二

一〇 ご主人のおたずねがありましたならば、なんとご返事申しましょう。↓補注二〇三

二 どこに送りはしたかと人が問うならば、心ははれない(で涙が流れるその)涙川まで身は行きましたと答えましょう。「心はゆかぬ」は「身は行く」に対する。涙川は涙が流れて川となるという慣用語。↓補注二〇四

三 目がさめてあたりを見ると。

三 だんだん山の端近くになってしまっている。

四 妙に帰りがおそいものだなあ。遠い所へ行ったのだろうよ。

五 住(澄みなれたこの宿を見捨てて西の山の端にはいつてゆく月影のせいにして、住みなれたこの家を見捨てて西の方に行った(大原は京都の西方)あの女を恋しく思う事よ。「おほす」は、責を負わせる意で、女を恋うるのを月影を恋うるのかこつけること。↓補注二〇五

六 浜・信「わらはばかり」。

七 童がさっきの歌を誦すと。

くを、男もあばれたる家に、たゞひとりながめて、いとをかしげなりつる女さまの、いと戀しくおぼゆれば、人やりならず、「いかに思ひいくらむ」と思ひゐたるに、やゝ久しくなりゆけば、簀子に、足しもにさしおろしながら、寄り臥したり。

この女は、いまだ夜中ならぬさきに往きつきぬ。見れば、いと小さき家なり。
(このわらは)此童、「いかにかゝる所にはおはしまさむずる」と言ひて、いと心苦しと見居たり。女は、「はや馬ゐて参りね。待ち給ふらむ」と言へば、「いづこにかとまらせ給(ひ)ぬるとおほせ候はば、いかゞ申さむずる」と言へば、泣くく、「かやうに申せ」とて、

いづこにか送りはせしと人間はば心はゆかぬ涙川まで
と言ふを聞きて、童も泣くく馬にうち乗りて、ほどもなく來つきぬ。

男、うちおどろきて見れば、月もやうく山の端近くなりになりたり。「あやしくおそく歸るものかな。遠き所へいきけるにこそ」と思ふも、いとあはれなれば、

住みなれし宿を見すてて行(く)月の影におほせて戀ふるわざかな
と言ふにぞ、童歸りたる。「いとあやし。などおそくは歸りつるぞ。いづくな

六 ここで本の妻が泣かなかつたのは、しいて平気なふりをしたのだなとかわいそうなので。元 そんなにまでひどい所へ行くだろうとは思わなかつた。そんな所ではひどく体もはかなくなつてしまふだろう。

三 やはり迎え返してしまおうと思う。

三 道みちずっとたえまなくお泣きになつていました。↓補注二〇六

三 下の「あたは御さまを」との「と」とともに「言へば」にかかろ。↓補注二〇七

三 惜しいご様子ですのにねえ。

三 夜があけぬさきに妻をつれ返しに行こう。

三 なるほど童から聞いた通り。上文に「見ればいと小さき家なり」ともあつた。

三 男は見るなり悲しくなつて、戸をたたくと。

三 (道中も泣いてきたが)また新たに。

三 誰ですかと召使にたずねさせると。

三 あなたが行かれた涙川はどことも知らず、苦しい川瀬(道)を何度も行ったり返ったりして、自然泣かれながらここまで流れて来てしまひました。「流れ」・「泣かれ」は懸詞。↓補注二〇八

三 こんな歌を聞くのも意外で。↓補注二〇九

三 夫の声に似た声だこととまで思われて、おどろきあきれて思われる。↓補注二一〇

三 何のことやら一向わけがわからないが。

三 わびごとをいうけれど。

三 全く申し上げようもない。こんな所とは一向思はずにお出し申したのです。↓補注二一一

三 (うち明けてくれなかつたのが水くさく)かえつてあなたのお心がつらくあきれるのです。(帰つてから)万事はゆつくりお話ししましょう。

はいずみ

りつる所ぞ」と問へば、ありつる歌を語るに、男もいと悲しくてうち泣かれぬ。こゝにて泣かざりつるは、つれなしをつくりけるにこそと、あはれなれば、

「いきて迎へ返してむ」と思ひて、童に言ふやう、「さまでゆくしき所へいくら

むとこそ思はざりつれ。いとさる所にては身もいたづらになりなむ。なほ迎へ

返してむとこそ思へ」と言へば、「道すがらをやみなくなむ泣かせ給へる」と

「あたは御さまを」と言へば、男「明けぬさきに」とて、この童供にて、いと

とく往きつきぬ。

げにいと小さくあはれたる家なり。見るより悲しくて、うちたゞけば、此女

は、來つきにしより、さらに泣き臥したるほどにて、「誰そ」と問はすれば、

この男の聲にて、

涙川そことも知らずつらき瀬をゆきかへりつゝながれ來にけり

と言ふを、女、いと思はずに、似たる聲かなとまであさましうおぼゆ。「開け

よ」と言へば、いとおぼえなけれど、開けて入れたれば、臥したる所により來

て、泣く／＼おこたりを言へど、いらへをだにせで泣く事かぎりなし。「さら

に聞えやるべくもなし。いとかゝる所とは思はでこそ出だし奉りつれ。返(り)

ては、御心のいとつらくあさましきなり。よろづはのどかに聞えむ。夜の明け

一 男は一体どういふ氣になつてしまつたのか。
二 もとの男の家に到着した。
三 女を馬からおろして。
四 今後は決してあそこ(新しい妻のもと)には行きますまい。あなたがこんなにつらい思いをなさつていたのだから。
五 この本の妻をこの上なくいとしく思つて。
六 家につれてこようとした人(今の妻)には。
七 ここにいる人(本の妻)が病氣になつたので、時期が悪いでしょう。(あなたをお連れしても)むさくるしいでしょう。
八 この病氣の期間を過して、よくなつてからお迎え申しましょう。
九 今の妻の。二〇 ひどく性急だつた性質で。
二 ついちよつと。↓補注二二二
三 今の妻。↓補注二二三
四 急に(侍女が)「殿様がおいでですよ」といふので。一説、「にはかに」も侍女のことば。
五 どれ、どこになのです。↓補注二二四
六 おしろいをつけると思つていたところが。
七 かざり立ててお化粧をして。
八 そこでしばらくお待ち下さい。
九 無我夢中で。↓補注二二五
一〇 きしきしこすりつける意か。函・信・神・由「さしつくる」。
一一 えらく早くもお嫌いなさいませね。
一二 ならし方が不十分で平均してないさま。
一三 袖で口をかくして。↓補注二二六
一四 未詳。↓補注二二七
一五 まだらに指の形につけて。(顔に指の形が残っていること)
一六 目がきよろきよろとしてばちくりまばたいていた。↓補注二二八

ぬさきに」とて、かき抱きて馬にうち乗せて往ぬ。女、いとあさましく、いかに思(ひ)なりぬるにかと、あきれていきつきぬ。おろして二人臥しぬ。よろづに言ひなぐさめて、「今よりはさらにかしこへまからじ。かく思しける」とて、またなく思ひて、家に渡さむとせし人には、「こゝなる人のわづらひければ、折あしかるべし。あやしかるべし。このほどを過して迎へ奉らむ」と言ひやりて、たゞこゝにのみありければ、父母思ひなげく。この女は夢のやうにうれしと思ひけり。

この男、いとひきゝりなりける心にて、「あからさまに」とて、今の人のもとに晝間に入り来るを見て、女、にはかに、「殿おはすや」と言へば、うちとけてゐたりけるほどに、心さわぎて「いづら、いづこにぞ」と言ひて、櫛の箱を取りよせて、白きものをつくろと思ひたれば、取りたがへて、はいずみ入りの疊紙を取り出でて、鏡も見ずうちさうぞきて、女は、「そこにてしばし。な入り給ひそ」と言へ」とて、是非も知らずきしつくるほどに、男、「いとくも疎み給ふかな」とて、簾をかき上げて入りぬれば、疊紙をかくして、おろくにならして、うち口おほひて、夕まぐれにしたてたりと思ひて、まだらにおよび形につけて、目のきろくとしてまたゝきゐたり。男、見るに、あさましう

三 どうしよう（どうしてよいかわからず）。
三 よろしい。もうしばらくして参りましょう。
「そこにてしばし。な入り給ひそ」の言葉に
じたふうにいひなしたのか。

三 氣味が悪いから、帰っていつてしまった。
三 男が来たと聞いてむすめの所に来たら。

三 侍女のことば。むすめのことばともとれる。
三 ひどくあきれて。「名残なき御心かな」の
修飾語で、「あきれる程」の意ともとれる。

三 ちっとも執着もない冷淡なお心であるよ。
三 なんてそんなにはおっしゃるの。父母のお
びえた声や態度をあやしんで言う。

三 「そのお顔はどうおなりなのです」とも、
ろくに言ひえない。

三 変ねえ。どうしてそうは言うの。

三 こんなに顔がまっ黒だから。

三 どうなったのかしら。

三 底本ほか諸本「ゆすりみて」。函・浜・刈谷
本等「ゆすりみちて」による。「ゆすりみつ」は、
宇津保・落窪・枕・源氏等にみえて中古の慣用
語。上を下への大さわざして。

三 乳母・侍女などのことば。こちらの姫君を
ば、殿がきつとお嫌になるような事ばかりを、
あちら（本の妻の方）ではしているさうだのに、
それに殿がいらいしやうたから、姫君のお顔が
こんなになってしまった。函・浜「かしこには」
の「は」なし。

三 底「をんやうし」、元「おんやうし」。他本
による。

三 普通の皮膚になったのを見て。

三 こう（はいずみをまぢがえてぬっていたの）
だったのに。

三 ご夫婦のご縁もだめになってしまわれた。

めづらかに思ひて、いかにせむとおそろしければ、近くもよらで、「よし、今
しばしありて参らむ」とて、しばし見るもむくつけゝれば、往ぬ。

三 女の父母、かく來たりと聞きて來たるに、「はや出で給ひぬ」と言へば、い

とあさましく、「名残なき御心かな」とて、姫君の顔を見れば、いとむくつけ

くなりぬ。おびえて父母も倒れ臥しぬ。むすめ、「などかくはの給ふぞ」と言

へば、「その御顔はいかになり給ふぞ」とも、え言ひやらす。「あやしく。など

かくは言ふぞ」とて鏡を見るまゝに、かゝれば、我もおびえて、鏡を投げ捨て

て、「いかになりたるぞや、いかになりたるぞや」とて泣けば、家の内の人も

ゆすりみちて、「これをば思ひうとみ給ひぬべき事をのみ、かしこにはし侍（る）

なるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる」とて、陰陽師よびさわぐほど

に、涙の落ちかゝりたる所の、例のはだになりたるを見て、乳母、紙おしもみ

てのごへば、例のはだになりたり。「かゝりけるものを、いたづらになり給へ

る」とて、さわぎけるこそ、返（す）ぐをかしけれ。